

平成29年度 つくば秀英高等学校 経営計画表

1. 学校の現況

学校名	つくば秀英高等学校			課程	全日制	学校長名	石川 英昭			
教頭名	砂田 益弘	副教頭名	野川 芳孝 小島 基浩			事務長	坂本 光久			
教職員数	教諭36	養護教諭1	養護助教諭1	常勤講師12	実習助手1	非常勤講師13	事務職員11	技術員1	合計 76	
生徒数	(学科)	1 年		2 年		3 年		合計		クラス数 合計
		男	女	男	女	男	女	男	女	
	普通科	163	116	138	100	163	88	464	304	24

2. 目指す学校像

建学の精神(自主・博愛・創造)を高らかに掲げて、指導者と青年たちがお互いに尊重し合い協力し合って、国際的研究学園都市つくばにふさわしい、21世紀社会の課題と未来を先導する知恵と進取の気風あふれる学校づくりをすすめる。

3. 求める生徒像

自分の個性を理解し入学の初志を貫徹しようと謙虚に学びながら、次に掲げる建学の精神の具現化「責任の自覚」「学び合い」「新しい自分との出会い」に努める。

- 1) 自ら求め自ら選び積極的な学びをとおして自分の役割と責任を自覚する。
- 2) 偏狭な考え方を飛躍させようと広いこころを求めて学び合い助け合う。
- 3) 可能性を信じ学園の仲間と切磋琢磨し新しい自分と出会う勇気を持つ。

4. 中期的目標

- 1) 特進Sコースを更に進展させるとともに、進学ABコースを進化させ特進Sコースに準ずる位置づけとし、本格的な進学からしい学習規律と生活規律を徹底し、地域社会の模範となり個性のある優れた入学志願者があふれる学校を目指す。
- 2) 特選選抜部・部活動同好会の改変をすすめるとともに、文武両道を推奨し、地域後援体制を含めて、全国に発信できる部活動の体制作りを目指す。

5. 本年度の重点目標

- 1) 2020年度に向けて、教育システムを構築し、地域の求める人材を育成する。
- 2) 新しい時代に必要な学力を身につける。
- 3) グローバル化に対応したコミュニケーション力を育成する。
- 4) つくば市に位置するつくば秀英高等学校として、科学の最先端に触れ、科学に興味関心を持ち探究心を養う。

平成29年度校務分掌各部門の重点課題と対応策についての評価

目指す学校像	建学の精神(自主・博愛・創造)を高らかに掲げて、指導者と青年たちがお互いに尊重し合い協力し合って、国際的研究学園都市つくばにふさわしい、21世紀社会の課題と未来を先導する知恵と進取の気風あふれる学校づくりをすすめる。		
校務分掌	重点課題	具体的対応策	自己評価 備考(進捗状況・課題等)
教務部	高大接続改革を見据えた効果的な教育課程の編成	平成30年度入学生からの高大接続改革を見据えて、今年度取り組みべき課題等を精査し、各教科および学年、コースと連携して、実践できることは実践していくことを目指す。	4 高大接続改革の各種研修会に参加し、教務内でも研修し、運営会議・企画会等で内容の説明や資料の配付を行い、浸透を図った。また、2020年度大学入学共通テストを見据えた24期生用シラバスの作成を各教科実施。新学年主任とは、高大接続改革に対する3年間の取り組み、特にポートフォリオ等について意見交換した。学びのための基礎診断テストや英語4技能の外部評価のあり方等、まだまだ未定のものもあるため、引き続き研修していく必要がある。
	生徒の基礎学力向上のための施策の検討	生徒の学力向上のために、各学年・コースおよび各教科とともに何ができるかを具体的に検討し、実行できるよう努力する。	3 定期試験問題の出題内容の適正化や成績不振点を取らせない工夫等、各教科にお願いをし、実践してもらった。また、成績不振点を取った生徒に対しては、各教科担任が定期試験ごとの指導報告書提出、教員研修の一環である授業参観等へ積極的な取り組みを促した。
	学内全般の教務的な部門の全般的な見直しと改善	学内の教務的な分野に関しての総合的な見直しを行い、改善すべき点は改善していく。	3 始業時間の見直しを検討・実施した。また、各部署ごとの行事の見直しを継続して行った。
生徒指導部	問題行動の減少のための方策	携帯電話の使用を認め、細かく指導をしていく	4 特に大きな問題はなかった。
		処置規定を変更し、教員に周知し、生徒への啓発を行っていく	5 変更の際に大きな問題はなかった。
		教員間の連携を密に行い、本校生徒指導の方策を一本化する	4 生徒指導の足並みがそろってきた。
	生徒の状況を把握するための方策	全校生徒の面談を実施する	4 学年主任・担任が二者面談・三者面談を複数回行った。
		スキルアップのための研修会に積極的に参加する。 また、その内容を他の先生方へ伝える。	4 様々な研修会に主任が参加したが、本校の取り組みで足りるものがほとんどであった。
	生徒の自主性を尊重し、建学の精神を實踐する行事を運営する。	建学の精神を念頭に置き、行事の精選及び、各行事の企画・運営を行い、特別活動の創意工夫を図る。また、教員と生徒会が連携をとり、生徒が主体となって学校の活性化を目指すように導く。	4 生徒が主体となって行事を運営することについては、生徒会や各行事の運営委員会が中心となって行うことができた。行事の精選については、今後も継続して検討する。
	PTA各組織における諸活動の活性化と円滑な運営の強化	各組織との連携を強化し、活動内容の充実を通して教員と保護者との信頼関係を大切に円滑な運営を図る。	5 本部・支部ともに円滑に運営することができた。
保健環境、カウンセリング いじめ対策室のさらなる充実	・落ち着いた学校生活を送ることができるよう、校内の衛生管理に努める。 ・引き続きSCと教員との情報交換を密接に行い、問題解決に努める。 ・いじめの早期発見をするため、アンケートや面談などにより生徒の実態を把握し、早期解決に努める。	4 特別大きな問題はなく、いじめのきっかけになるであろう事柄について、小さいうちに対処することが出来た。	

校務分掌	重点課題	具体的対応策	(自己評価)	備考(進捗状況・課題等)
進路指導部	生徒一人ひとりの進路実現に向けた支援	四大進学率の向上を目指す。そのために指定校・AO・公募推薦の積極的活用を努める。と同時に量的向上のみならず質的向上の方策も各コースと連携して模索する。	3	四大進学率向上については、3学年と連携して、75%を超えることができた。しかしAO・推薦試験については、直前の対策のみならず、長期的な展望の必要性を痛感する。一般受験に対しての最後まであきらめさせない指導については、各担任の理解もあり、これまで以上に生徒たちは粘りを見せてくれたように思われる。
	情報の整理及び集約	推薦試験、難関大学入試のサポート体制の充実、ファイナシステム(ベネッセ)、ケイナビ(河合塾)のオンラインシステムの活用を促進し、生徒ならびに先生方にとって使いやすい進路指導室の構築をめざす。	3	情報の整理と集約には努めてきたつもりであるが、次のステップとして情報の活用についてしっかりと研修を深めていきたいと考える。
	進路情報等の発信強化(保護者参加型の進路指導を目指して)	集会・進路通信等を通して情報発信を密にしていこう。また、進路情報誌を厳選し、生徒のニーズに合った情報提供につなげる。さらに、進路要覧及びDRの活用を促す。	3	情報の発信にはメッセージ性がとても重要であることを痛感した。進路通信・要覧の発行についても工夫を凝らすことを忘れずに継続的に行っていきたい。また、導入からはや8年経過したが、DRの重要性はますます高まっていると考える。
入試広報部	校内での進路や行事に対する取り組みを積極的に広報活動に活用し、志願者層の質と量の確保に努める。	パンフ・ポスター、広告、インターネットなど様々な媒体を通じた広報活動の充実と、各中学校・塾に対するよりきめ細かい対応を心がける。 各コースの活動内容・実績・特色について、より具体的に明示し、志願者増(単願・一般)へつなげる。	4 4	経費はかかってしまったが、必要十分な情報提供ができた。中学校・塾での説明会も前年より多く実施することができた。次年度は、情報提供は維持しつつ、経費削減にもつとめたい。 説明会での内容は例年以上に充実していた。入試広報部の努力もあるが、各コース教員の協力があったことも理由だと考える。こういった努力の積み重ねが結果として表れたと考えている。
	第1学年	「基礎・基本」に立ち返り、「確かな学力」及び「生活習慣」を身につける	ホームルーム重視の教育活動。生徒と共に歩むクラス運営。「見える教室」の実現。面談重視のクラスづくり。	5
朝自習の徹底。3科目の基礎学力定着へ。8:35には朝自習で静寂と緊張感のある「10分間」の実現。定期考査と連携した学習指導の構築。			5	年間を通じて朝自習を展開することができた。クラス担任は、3科目の解答を板書したり解説したりした。模試の成績アップの原動力と言える。
面談重視のクラスづくり。新入生課題「自己紹介」を基に担任はもちろん、学年主任も面談を実施し生徒を把握する。			5	7月までに学年すべての生徒と学年主任面談を行った。クラス担任は、繰り返し二者面談、三者面談を実施した。生徒も相談しやすかったと考える。
清掃、教室環境整備の徹底。社会に通用する身なり指導。学年が一体となって取り組む服装や頭髪指導。			5	年間を通じて、教室の環境整備、美化に取り組むことができた。教室の環境が整備されていることで、生徒は落ち着いて学習できたと感じる。
校務分掌	重点課題	具体的対応策	(自己評価)	備考(進捗状況・課題等)
第2学年	基礎学力・社会的関心・表現力の向上、および進路志望の明確化。	授業に「学び直し」を取り入れ、高校1年次や中学次の取りこぼしを補う。(到達度テスト、確認テスト、放課後補習、スタディサプリなどを活用)	5	到達度テストと「スタディサプリ」の活用に向け、各生徒への呼びかけとともに、学年課題の実施、各教科課題としての活用、ホームルームでの活用などを行った。また、英語科の協力を得て、基本的事項の総復習を実施、模試の成績向上につながった。
		「さわやか新聞」やLHRでの話し合い、修学旅行などを通して、現代社会や日本文化などを相対化するとともに、社会的関心を高める。	4	社会的関心の向上を掲げ、1、2、6組ではニュース関心アンケートをもとに教員から話をした。また、オーストラリア研修旅行およびファームステイを通じて社会的関心と視野の広がりを実現した。
		志望理由書等の指導を軸に学部・学科研究を重ね、志望大学を明確にさせる。	5	志望理由書の早期指導に向け、教員向け講習会を実施。その後、LHRや個別面談を通して各生徒の志望理由書指導を行うことで、進路指導につながった。
		朝自習などを通し学年全体で協力しながら、英語力向上を目指す。	4	英語力向上に向け、英語科の協力を得て基礎の復習を実施、模試の偏差値向上につながった。
		読書プレゼンや修学旅行プレゼンを通して、表現力を高める。	4	修学旅行プレゼンテーションは実施できなかったが、読書プレゼンや毎月の学年通信エッセイなどを通して、表現力向上に努めることができた。
第3学年	生徒一人一人の最善な進路実現を実現する	「志望理由書」作成を軸に、それぞれの生徒に応じた丁寧な進路指導を行う。	4	指定校推薦の厳格化(次年度への考慮)・AO入試戦略を明確にして、夏休みの特別プログラムを編成して対応。各クラス担任の明確な目標設定があったおかげで、細やかに対応が出来た。
		基礎学力向上に向けての対策は3年次になっても継続的に実施していく。進路関連行事への積極的な参加。	4	定期試験前直前学習会は未実施であったが、2年間の継続姿勢や春休みでの特別講習会の実施・ゼミへの積極的な参加・キャリア探への呼びかけなども積極的に行われた。
		土曜日には、特別講座を毎週(19回)設けて実力アップに繋げる。放課後の模試対策講座は継続。	5	土曜のS特講に対してのAB特講を実施・放課後の模試対策講座も3年間実施、多数の他学年教員の協力により、国公立14名(地方舎)の結果に繋がった。Sクラスの半数が国公立大学へ合格・日東駒専へは30名合格。
		推薦・AO入試後も学習に向けてのモチベーションを最後まで維持させる。	3	進路での合格が出た後の指導が難しかった。皆勤賞・精進賞が多数いた反面、2月以降の欠席が出てしまい少し残念な結果であった。早期に決めなければならないケース・AOを数回失敗してしまったケースなど心のケアも含め今後の課題である。
		一般入試に向けた対策をより充実したものにしていく。プレ入試へ参加・特編プログラム構築(1月・2月)	4	昨年度の反省を生かした。進路主任の多方面・多角的アドバイスが最高の結果をもたらせたと思う。14名の教員団がTEAMになり、進路副主任の的確な指示のもと、総合力で戦えたと思う。

校務分掌	重点課題	具体的対応策	(自己)評価	備考(進捗状況・課題等)
Sコース	学力の向上と希望進路実現	学習時間の確保として、放課後の特設授業・特別講座、18時から20時の自学タイム、土曜補講を実施する。更に自学タイムにおいては、個別指導・授業の補習も導入。	3	特設授業後の時間は有効活用されている。2年の部活加入率が高く、18時以降は少ないが、受験期の頑張りにも期待したい。今年度は個別指導ができなかった。
		高大連携事業(模擬授業・ワークショップ・国際交流)を通して、コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力・学力の向上を図る。	5	1・2年合同ワークショップは非常に質の高いものになった。模擬授業もレベルを維持したい。筑波大留学生との国際交流を計画中。
		全教員の協力のもと、探研活動を通して、知る喜びと学ぶ意欲の喚起を図る。	3	多くの教員の協力のもと、流れも確立し、限られた時間内ではあるが順調に進んでいる。
ABコース	学力向上とキャリア教育の推進	AB選抜クラスのスムーズな運用を目指し、22期生及び23期生との連携を図る。	5	1学年との連携を図り、告知、テスト、決定までスムーズに行うことができた。次年度は3学年が揃うため、縦の連携を模索したい。
		家庭学習ノート(OSノート)の利用を積極的に促し、学習習慣を身につけさせる。学習意欲の向上を図ることで、ABコース全体の学力向上を目指す。	4	家庭学習ノートは最初が肝心で、担任の指導にかかっていることは否めない。どのクラスも工夫をし、習慣付けしたが、クラス間で温度差があるのも事実である。
		キャリア探究講座を充実させることで、生徒の職業観を育成し、大学進学への意識を高める。	5	今年度は8回のキャリア探究講座を実施した。特に外国人講師を招いた第5回の講座は、生徒たちの反応も大変良いものであった。国際化が進む現代において、英語に興味関心がある生徒は増えている。学校の中でネイティブの英語に触れる機会が増えることが必要だと感じた。
スポーツコース	特色を活かした授業の充実とスポーツを通じた地域社会への貢献	「プレイヤーズファースト」の精神を基盤とした合理的・科学的な練習を計画的に実施するとともに、全国レベルの競技力を身につける。	5	各々の部活動が非常に高い競技水準で活動をしてくれた。多くの部活動が全国大会、関東大会に出場するなど素晴らしい実績を残した。
		専攻体育、スポーツサイエンス、特別支援学校との交流、老人ホームとの交流の充実を図る。	4	実技演習は年間20回以上実施することができた。それぞれの部活動に役に立つ内容であった。新たな試みも実施することができた。
		知育・徳育・体育の調和のとれた人間性を育むために、月に一度のコース集会や校外清掃活動を実施する。	5	コース集会、地域清掃活動の実施回数は昨年度を上回った。また、その度に知育・徳育・体育について考え、人間性を育む重要性を説いた。
学校関係者総合評価		意見等		総合評価点
		生徒一人ひとりにきめ細かな学習指導・進路指導がなされており、部活動においても、全国大会レベルを維持する運動部を有する。また、公民教育にも力をいれている現状が見受けられ「秀英らしさ」は投票行動にも反映されている。		4

[ 評価基準 ] 5. 十分達成できている 4. 達成できている 3. 概ね達成できている 2. 不十分である 1. できていない